興孔志行記　巻上　湖月栅條　著述

菊行御小江戸と立寄ろ小

芭蕉翁分雲句ふ草鞋之ろ　季下

月ゆ見る茶ふ紙煙乃乞食　菊

竿法ふ乃ふ白を和を

宿まいろ世人西行の月ゆ小林の暮　イセ山田　雷枝

そ世紙と茶屋乃破笠　菊

花の咲かゝる草は菊の蕾　山田　揚蓬
妹子に志ゝ〻と嫁の名和毛　菊

蔦猿を追ひやるこゝろの

即の横むら捨りん木の紫式　ミノ大垣　嗒山
薄ゝ雲乃鼓四ゝ一　菊

雲ゝ紀猿霧よ墳と美世中次　如行
古人ゝ雲ゝ赤の木ゝ　菊

我もさひよ安ゝ奥の藪接　イカ　雅良
紫の湯よ弱る雷の元よ香　菊

赤ゝ櫻軒別枇杷の廣葉小　京鳴滝　秋風
質ゝ動くゝ山茂は茶　菊

橋ゝ〻〻日永し　横入歳日　湖春
赤乃念の色素ゝ行く　菊

夏草よ宋玉が庵のあとの庭の卯の花　若照
笠もてさくる庭の卯の花　翁

画讃

赤人も今一入の酒機嫌　大ツ　珍碩
土器ふさぐ水の掘筆　翁

春の御のにたうえを
よはしてす

こんせたやふ茄子をちさる形の烟　京　惟然
平家ふ我笠ふ我笠ふ　翁



弥〻や蔵地ふの頃乃菊牡　ナルミ　如尺
東士ハ彩少〻ふ多毒　翁

笑蔵笑ふ多毒ふ神ふ浦ふ　ナコヤ　荷兮
旅寝ハ雲を見るあり見　翁

秋の人毒引き花〻を笠為うる　江戸　木因
蔡年森やうう蔡ふ集中ふう　翁

ちる〻て見せたやや蔡湯の函抽屋　ミノ　巴百

竹立あらしの雲不破の関の雨　翁

麦風や麦乃中行あぜ道　来道寸（ヲヽミ）

うら畑ふいけむ京に　翁

白雲の出てきて海行雲分ル　猿雄（イカ）

霍の臣我わ白ル葉ル雄　翁

時雨てや花まく残る桜笠　大阪（ヒの女）

霜ちるや蝶ハもる若草　翁



業雄干きて遠のたちやタ涼ミ　曲水（カ）

紫色ハ月ハ乃業　翁

興ハこもなくて多本の樹ル家　霞川（ナコヤ）

小麦ヶ月前乃動く蓑ハ　翁

義の歌ハ多ハ孫ハ　荷弓（ナコヤ）

打てや掃ん庭ハ年末　翁

和ふ業よそ年の手作麦（スルカ）　如舟

田植をうゑふ猿の朝起　菊

芽出しより二葉よ蔵る昔の実　丈艸（ヲハリ）

畠乃葵ものうゝ佐和葵花　菊

義奥陸くゝ下うんと我ゝ茅
蛍坂書伝寺尚水川乃
河原ゝ沢川ゝ下ゝ
泊佐ゝ中遠ゝ

西時ゝ栗乃忘さく称え名　桃雲
いつきの艸ゝ峠出る蟬　等躬
夕食の銭ゝ面ゝ月ゝ　文西坡
秋来ゝ布西ゝ布西ゝ　曽良

高久角亭にて

稼衣子苗子清水世古舎人　曽良

わさの乃堤の中や先打こゝろ　大世俄

夏月丸子氏の書こゝろ為て　等躬

○

和方し所ふおゝ

茨ゆうこゝ遠ゆ多りかゝを牛

市の子俳諧者こゝろ紙布　等躬

日暮西ふ笠をなくゝる涼こゝて　曽良

大世俄



○

和ふし伝て奥り

風の香も南にちゝ家こゝ川　芭蕉

小家ゝ形形をいのふ夕ゝち　柳風

ものしかく樽ハ雨こゝ埋まゝく　東端

○

六月十五日出羽国田寺修験亭まて一所奥行

涼しさや浦へ入こゝ家こゝ川　大世俄

月清ゆ星なゝて浪ゝ紀こゝる　剣直

黒暗の死り庵乃急明こゝく　不玉

樽ハ雨ヲ待つめてをれ　宜連
皮とちの打ぶ俤りて市ぬまち　曽良
ひきくまかきの霄乃油火　住暁
ゑ様姿のかう立紀花ちる　扇風

○酒田伊藤元吟亭ホ却て
江上之晩望

ゆ月ゝ山や吹濁りきて夕涼ゝ　芭蕉
海松茸磯ゝ乗む帆柱　不玉
月出ハ開屋敷うゝ人煙持ち　曽良
土手の電乃ゝもる秋風　蕉



志ゆゝ立かうゝ遣ゝ色松　上
ゆゝ主のをちを物ふ蓑の毛　良
雪屋敷ゝ鶴飼の者ゝ冬ゝ籠て　蕉
火ゝ樽ゝけふ泳ゝ色つ　玉
海原ハ道も半紀まて切ゝめ　良
松笠ゝ送る武環乃古屋　蕉
苔桃おうき悪も志ゝて　玉
彼の神ゝ中ゝの孫ゝと　良
清佐ゝゝゆゝちゝ我も無ゝん　蕉
此世乃ゝ夢ゝ入　玉

行つゝ見る書堂寺社繪の声　良
ゆふも命しゝ嶋乃宮食　蕉
かしけるゝ志し蕾ゝ菜夢ゝ　玉
瀧乃旭社宗庵所　玉　良
二　その宮へゝ本惠ゝ蕾く春の風　玉
蕾ゝ雨ゝ瀧ゝ清ゝ志し雅　蕉
剛力ゝ清ゝ志ゝたゝ笹伯し　良
棺ゝ行ゝもゝ塚乃ゝ笠　玉
和尚ゝ行ゝ岩ゝ結ゝ　蕉
惠法法衣ゝ袖ひく法　良



四日志めん丁を俵ゝ生姿ゝ　玉
月ゝ濃ゝく陳中乃市　蕉
清樂ハ志し蕾ゝ奥ゝかんし入　良
小紬袴紙送ゝ戒乃師　玉
我ゝ本の母ゝ紙ゝ床ゝく　蕉
笑ゝめゝ見ゝ家ハ貴れて　良
十　志ゝ良ゝ京持伯ひゝ古ゝ集　玉
花小蓑ゝ切ゝ坊の酒藏　蕉
營の巣伯ゝ知ゝ和ゝ　良
琴種ゝゝゝて第ゝにゝ　玉

錦木を仙里て古き恋をたゝん　蕉
ちとゝまる竜をたいのむ客達　良

○出羽大石田にて興り

五月雨やあつ巻て涼し　実上川　芭蕉
岸ちかくなる船繋　舟杭　一榮
瓜畠いさよふ月をたて　曽良
里乃むすひ水葉乃細石　川水
朱の子ちいさくさむ夕日　榮
ちゝを恋し　懐乃吟　蕉



ウ
俺ハ笠を脱て山おろし　水
雲むらひ星国に焼目　良
永乗の古墨地紙をいとゝきて　蕉
夢少し合歓の大麿の残　榮
菫の色紙咲とかゝ地き　良
瓜ゆうりの雛ハ乃石　水
捲ちるさ花思ひ這入て　榮
病ふ人ちゝ苦新雨風　蕉
月智深井もの月ゝ和歌れ　水
砧うてとゝまる撰くゝ山さくらい　良

春の後悲れ打ちる花むしろ　栄
涅槃いとる冊を広新の塔　水
二
猿多邑ハ浮世の外の春富て　蕉
刀持ちも甲斐乃一乱　良
世く乱れ人心をつめ軍江　水
手の畫あひよ割る松の末　栄
望まちる髪ハ広髪の明るを　良
集み撞ち乃名を留る月　蕉
鹿笛ハ嘶ふも拾ふ足跡　栄
紫煙ようおく家絵高る　水



孫ちと咲ハ花を盃のをとふて　蕉
多くかしぬ霧日乃ちを　良
古々の文をを涙をふりをり　水
云繁倫をる紅の葉合　栄
十
雪を乱ち撞ち迄の市ち拾ちを　良
線掃の日ハ拾仲尾乃客　蕉
亡人を古ハ懐ふかくらを　栄
嫌為ハ傳ふ入相　水
ちを堤理ち紙面ハ軍乃花　蕉
山田乃稲をを絵ふむを面　良

おなじ江亭にて
趣吟なり

孫しや山茶を生ずる初茄子　翁
蟬すり車の音ふる井戸　重行
稲穂の黄いそうを撥ぬく　曽良
国孫生ずる家の三ヶ月　呂丸
百ゝ新小菊ゝかりかさね梨の花　行
孫すり胡麻の残り付しを盗む　翁



ウ
山の端よ清くかゝる月帆無舟　丸
蔡なすよ黒豆心こまやかに次　良
栗稗をは毎の舟よ吟他て　翁
弓はかり武勇石乃戸　行
赤櫻武毎は記念と植置き　良
雀よ泳ぎを小田乃苅　初　丸
此緑七門の板橋尚遠し　行
敷免すゝ懐ふるさとの月　蕉
きぬゝハ東西七同しもの徒　丸
宿乃安堂如堂ものう節　良

婚入の花ゑふ馬に寄りて　行
えりの廓を〻綱手焼る　丸
二重紙付き雲ゆ山を歩に沒る　菊
奈ゑの都ゑうゑゑふ始ふ　行
山雪に先ゑのくれとや答ゆきて　良
森を分うゑふ化粧美し　蕉
遥々ゑふ見ゆ沒ゑ筑紫舟　丸
ゑふ九くに友ゑらゑせて　良
千日の尾ゆむさゑふ小松り〻　行
紀ゆのう〻ゆ踏ゆふ沒高　丸



夕八嶽のあふゑ夢や笑ゆん　菊
ゆきゑ〻ゆ嵐ゑふ女郎をふゆ　行
ゆゑふ川舟を行脚の宿て見く　良
温泉かゑふ陸奥ゆ秋風　菊
十　ゑゆ丁のゑゑふ男ふゑのさ白　丸
山和ふ伊ふ作ふゑの蓬ゑ　良
尾衣男ふ海ゑゑふい〻ゑゆ　行
りかゑふ面ふ見ゆ沒ゑ稽　丸
花の村ゆゑと屋〻ふ好子鳥　菊
鶯ゑゆ四のゑゑ蕃乃山寺　良

新庄よりわかく盛岡あと

[illegible]　風流

[illegible]　芭蕉

[illegible]　孤松

[illegible]　曽良

[illegible]　柳風

[illegible]



蝶けらる父ら兵を[illegible]　蕉

筆試く判[illegible]　流

梅[illegible]　良

簑を一の[illegible]　如柳

三[illegible]　木端

信乃書きく[illegible]　風

[illegible]　柳

萩蹈出[illegible]　蕉

川[illegible]　松

痲法[illegible]　端

蕉良

陽炎や清水流る庭苔乃雲　流

朱を捨て茶に投せる蓼水　端

果なき恋を月代　凡

袖香炉ひとしほ八重に立てて　柳

牡丹に風のあり　蕉

去僧のいく小蝶もつめん也　良

武士みな入東西乃門　端

おのおのの鹿し明るる奥の原　流

初鐵ひとしむ草枯の色



蛙哀れく捨てにかさん蓋の笠　柳

うゝ花を尚さるる美濃の若草　蕉

系さるの出る紙子の少名草　凡

浮世の裾よ足ゆる簑也　端

奉行佐御ぬ着も踏まて　蕉

ちゝまて京紙屋の小紙　流

ゆゝ〳〵石のかゆよの紙ゆり　凡

ちゝる山七面乃ほとく　柳

咲の新花紙たよ袖志きて　端

菊ひとり胡蝶舞ふ宿　良

[illegible]山本坊にて無名

[illegible]　芭蕉
[illegible]　露丸
川舟の綱[illegible]　曽良
[illegible]　釣雪
[illegible]　珠梅
北に東[illegible]　梨[illegible]



ウ

居眠りして盃の日陰よりさめぬれば　雪
百里九折の末百九十里　蕉
[illegible]の紀[illegible]人　丸
斧持[illegible]神木乃夷　良
[illegible]の[illegible]　雪
[illegible]　丸
古御所弘寺[illegible]　蕉
[illegible]　水
[illegible]紀されて[illegible]　良
[illegible]　蕉

杉ふるなの苔に志ぼりて　丸

的場はたゝよふ山吹の咲　雪

二　蕉風ほのぼのたのの糸はかを　蕉

汲くいるく醒井の水　丸

見賞はたゝ清て望り公義　円入

歌出門の二義遠ゆるり　良

かゆ清る夢ハ世界の比義　丸

素堂　蕉

うゝ雪ハ杉の古葉はゝ重　水

温泉は香に昌る旭敷き　丸



麓の苔は猶岩に矢絵刻く　雪

篠の葉は高ふ高ふ葉をのゝ過　入

身山の嵐は風に聖ふ志世　良

郷路の夫婦る稲畑のうけ　水

十　ちゝふの桐ゝ見ぬ右　丸

明る蓼く行　義乃窓　雪

盗人ゝ行ゝ妹の跡を泣て　蕉

形見ゝ男用ゝ　良

重出者に紙を筆は家を　本坊　會覚

幕出揚ゝ多乃森　水

鐵砲

忘れなき紀に蝉啼山の雪　本坊 會覺

秋のしきみをかへりみる月　をさ紙

弦かけて笠は篠に掛て置く　不玉

まくらもとれハ紙衾すり　不白

ちりくずに冷ゆ家のむしろかね　釣雪

偏も志らぬ嘘をむしるか　フ



ウ 笠嶋はいかにとよる笛なれ馬かりて　巳百

入日ひるやく藪乃そんの末　玉

足うらの菜は戴く黒祢宜　、

娘なふまろき襟はほくらふ　百

待宵に枕香炉のかすみ乃先さそて　、

横川よ身捨ちらふ中秋　玉

降止て傘ハまだ畳ぬ秋の雨　、

八朔を身懐出状　百

薄雪の下に雪踏をときぬきて　、

皆しら紫粉をまぶ立かれ　玉

春ふかしとも花ゆゑ夢ん　百
河原おもてを流る柳東風　玉
二
立ぬの紅梅乃香の春の氣　如行
ちもくれ行おろを酒樽の後　支考
ふき出す菜とそちらの次六月ふ　行
子の這こゝろ猪持ての皇　考
小屑屋小蘭の皿を洗きの冬　行
いもくしの名を洗きいさこゝろ　考
雲陽ろ庄屋この門乃唐衣　行
あ行ちくむろ蛤芝ふ　考



下帯は跡のこゝろ深き、
ゝ毎坂よりしたやゝ　行
未拍の夕未ふ月孤ゝ、
俳句ゝ言ひ鐘沢の湯茶　考
日雀峠笹竜は目毎乃拍おゝ、
未の氣ふちゝ義のゝ蓮の屋子　行
行ゝ義子息坊ゝの屋つまゝん、
灯火のゝふ雪乃庚甲　考
和尚ゝ河は通ゝかゝ持ゝ　行
義遥ふ皆戸の俳歌屋　考

越後国高田の医師
細川素庵亭にて題

菜園年ゆきとりかさを帆柱　翁
萩は篇を伝る事うける舟　棟雪
炉きむるの夕アは秋のいふせさて　吏也
雪素ゆきて言葉乃下　曾良
風ハ一形ゆきて
さまをいそく



加賀国北枝亭ホ御ものを留て
名殘乃惜ハ此夜

雪うりて乙多追行ゆ[illegible]れ　北枝
花ぬ乱ゆ山乃姿ゆ月　曾良
月ゆ出ゆ和様ゆ袴ふみ込ゆ　[illegible]
鞘ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ　北枝
ゆ渕ゆ猟ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ　良
紫苑ゆ[illegible]ゆ峯ゆ[illegible]ゆ　蕉

ウ霧深くたれ込める菅の寺　枝
拙女四人田舎わたらひ　良
房出に悪しき男付名もありて　蕉
数奇を制するとて魚食ぬ好り　枝
蓮はいとやさしかりしかども　良
先祖の供を傳く学門　蕉
をりの祭乃上座うたうたう　枝
嘉陵川掃猟の弓井　良
秋風を本の云ぬ子に問ふく　蕉
ふるさと社乃はたく色葬祭　枝



花の香ハ古よ部乃町作り　良
春を殘をふる玄仍乃宮　蕉
長雨さもあらく羅波の奥屋し　枝
銀の小鍋部出す茅焼　良
手枕よ志ねの埃をうち掃ひ　蕉
美しかりて歌く霞　枝
清き小袖薫　蕉
非蔵人なる人世の業　良
略式とて巻に法華一巻よ　枝
長う法くふ三月のさ日　丶

和歌山草の枕よ涼しかれ　蕉

小畠七を一伊勢乃秋風

疱瘡を葉名日永し流行色　枝

丙時男の抱はるるあり

十四五の仏女は笑ひやうか　蕉

茜染おかふ子あるを

仲秋の空治の細代とる稼　枝

寺〻使ふ紅白三

徒接て何をうんかの茅りをる　蕉

破　ちひてる海生蓋　利　枇杷

加賀国重澤を発ち

如是くの人心和くして紅毒の萩　芭蕉

去るを源〻蓬ふく東　亭子

月尺〻と猟もあるを舟ひきて　曽良

手を帰子を待つあるあり　北枝

松の風蔓蘇乃蓋受けいさんぬ　工蟾

遷あるく翻くに曽の元と羅　志格

ウ 甲斐なる清湯本の峯は遠のかに　斧ト

下戸に指さきくるる紅葉橋　唐生

紫はなる緑雲ちきれしより　李邑

道の地蔵よ枯らるるや　祝二

喚鐘の響乃声も峠まで　夕市

家ぞ近きむかし窄塞乃舟　蕉

肌の衣女乃かすりを帯乃格

舟遊湖水く我らつ注　蟾

おるうかかかかかるかの声　枝

雷ち新塔乃都をかりり　良



世平紅葉を竹乃柱も三四本　子

新緑清る絹は絹　邑

二 秋も去れかかる雲小八声の聖梵寺　市

むらを去かかる月の清凌　ト

ちりかかる花よ系橋里を去　生

鵜去る翁道為き新　主

支考遠樓の志ありしを不遂
小川乃翠よ足西まいの地なり　甚角
元禄四辛未年四月
見ふ杉檜別乃拙を得夫
飯能の能市ありしよ郡うか　雲角
をの古付て園角志を沢　支考
和ふ雲能も幸ふ事如奥深ふ　挑隣
行に河ふ杉乃春に　角
月乃東庭よ西風を多く　考
角力を尚を村ゝ行前美　隣



所〻の秋通を歌と軽むなり　角
本名志〻ぬ徒借ゝ　支丶
夢稀七人歩ふ之る屬り御　隣
三度〻を浦ふ江戸橋の藝　角
清やく〻面の乃うゝ丶石尾　考
さやゝ川を い引角む支豆　隣
蘇〻たゝて病事ゝ丶ゝ　角
女客よ事内引　春四盃　考
思月小稀宜の化雅のく八四き　隣
彩羅ゝ使舟流家事　角

弱為の事丹ふなの無引事　考
長時代紙子八ム紙幣紙　隣
二五条十二ノ行のるもの代の風　角
産飯ものふうち行合せもの　考
雙扱を排捨たるふ蕪蓮　隣
洗濯のある紙衣ものふ　角
傾城を娘くもたるもの　考
洞ふもつむ寄代立奉　隣
盗ものはくもむ面の舟　角
をやの廉代書く拵ハせ　考



蓮の実ハ佛のふし猿ものん　隣
形ものふ扱もの禍のおしふ　角
伊勢参り懐一ものにものはて　考
ものりはもの魚行いやしき　隣
十
戸扱やもものくヨ夷ものる鍋の尾　角
ものふ物ぬ俵土の掛ものり　隣
擬集拙行御の狂ものくさて　考
内のものはものと如儀せん一徳　角
花紙ものる初の品乃夷しもを　隣
幾号紙ものもふ魚沼の事　考

行雲は碎くく流し磯乃山　支考

ふるさと雨ふり鳴る木古島　重行

小麦苅後の寸法し青やまくく　呂丸

傘を本小四五人蓑　考

月蓬〻翅織の上乃きの笠　行

蟄柿の蔭ふく吉はひちる　丸

野盤子



蓑吹面賀名む波りの結書し　考

結ふ水を吉ふ文きへる蟄　行

獨蘇の姉蓑〻まく引ふ　丸

猫蓑通ひと時新かうかみ　考

拒穀北白ひお野小吹きりて　行

仲乃うさりう蓑を面　丸

食仕舞ふ味噌の蓑を捨れを　考

先見なるふ撥の織出し　行

門前の蓮を い寸〻宝庫〻を　丸

月〻雲殺先蓑てり北沼　考

行　九　考　行　九　九　考　行　九　考　行　九

二

定家卿の風ありしなる村雨の　九
家考くまなく念仏せむ　考
家造りの様のまへ細なるく　行
横手称ふの枝ふくの　九
十銭ふの温飯一桶ふまよせて　考
行のまをかふもまの美よ　行
ちふ称考し霧し紀花の奥　九
翡翠の蔭ふる山吹の中　考
いふまふの稲場小君のかり　行
美濃路乃書八二月三月　九

夏の月や一息よ領涌の味　幽通
義面をうむ河骨は赤　不玉
子仏は親の手より赤くなり　呂丸
緑豆子は小任勢なる秋　不撤
出産麦の後は麦を月の彩　玉文
麦乃志めりふ鹽うれむけ　支考



雅子の這来る道筋行分く　玉
行御の塔試舞しき　丸
懐紙ゆ取く十二銅　撤
鄉賣男子の鞘ありうり　文
奥涼き材木町乃新茶子　考
あれとく作の昆布門　玉
夕月小毋の茅鞋は紙解きて　文
後ろ八孫き柿　撤
鳥瓜枯く黄小なる西瓜　丸
獨き身小乳を考　考

六七詩花は廣瀬の里の史玉堂　玉
夕日のてりの小船軽しく　文
二
東風海原琉球表彩しく　考
切ちかく角ふかく小西は舟者　九
海まつ〳〵高の世りぬる本津の舟　撤
佐倉乃鈴と示堂して来る　玉
細長紅張帳小面の漏出して　九
よものやう彩むらつきの雲　考
味噌豆を移ふ行はれおおめ　文
ふの佛示めうれし　撤



心茶花のうち出るに雪ふりて　玉
宰府やいふてゐるうん　九
後の立義若ふるむ青の月　考
聲女の紅よ世秋の法〳〵　文
十
落栗の本は茶のとをおろうて　撤
風〳〵吹〳〵　蛇　夜　玉
ふ鍬〳〵古代切おむ舟の中　九
筒御板ふ〳〵ゐる法師舌　考
横ゑは尚ふ花の咲のうち　文
〳〵紅立ゐる巌虎枝竹　撤

河豚ふくとふるかのうつくしき　不玉

火桶の縁接ちかしうり　徐通

月見ぬ頃の菓と撥音く

月てらくこのたれ

ちちとふよ　徳へハあら秋の夢

見ぬ中ちかりしゆる　雲雀



廿九田

ウ

庵漏ぬ稿のうち時鳥

渡ち捨し　大年乃　蕾

秋昭魚の鮒ち　答意出羽の霜

中ちふふの屋つまちる　通

夕魚のいろ咲ても奥ふ

涼てちふ　おもふねハ　玉

黒暗のうち　時ちめく

面白須我　秋乃　徐通

舟歌ちく　ハ月て　徐の月

嵐の杉よく　菓のちく　玉

猶しろく蚤遣月 鶯る花さかり、
かひてのりしる 正月の餅 通
二
鶯の啼ハ深世の何よ安、
毋付袋の夕ぐれ 蝶 玉
俳切の始雲る時ハ晴しなて、
星付 晴 冬
蛇まく餐ふ同ハ菓やもふ、
ものし彩しき 義 猫 玉
三ヶ月ふ男世帯の寄けるて、
一巻もよくさしたる何ま酒 通

萩咲くは垣の本付をくこと、
ほとまて家し西行の枝 玉、
有疑や津垣の舎利を拾む時、
両し彩しき絵蓋ふ高く 通
十 尚ほ出ふ 懈 ふ 脇の私径、
短 鶯 啼 弘 乃 見の別 玉、
寄こくこと清門の叔付 鶯 く、
ものふ蔵寄寄音のおうしき 通、
切し元を素ゆくこ多 花の山、
寄こくこと 鶯の寄 稀ふ ふ く 玉

和歌二　[illegible]

初雪紀　[illegible]人貸る座敷る　清風
有明雪紀　[illegible]ヤ　芝如のうち　支考
警の唱笛蕾共掛[illegible]　不玉
浅瀬町ハ[illegible]　風
[illegible]待陳ふ[illegible]　考
家吹通[illegible]　玉

尾花沢



作[illegible]十綱の揺糸[illegible]　風
色葉白き[illegible]　考
大小のうふを[illegible]月　玉
七夕[illegible]を意の[illegible]梨　風
玉章を[illegible]く[illegible]　考
白紙汚[illegible]　玉
[illegible]　風
[illegible]　考
川中小千[illegible]車　玉
[illegible]代家[illegible]　風

夕暮方に移る時雨は茶漢歩て　考
小倉の峯を帰るかりのよ　玉
傾城乃舟をかしてゐるおろす月　風
かゆく寒蓬ハあらかるゝ人　考
紅移畑の蕎麦盛と切ふり　玉
泊連冠とよ名ぬ軍れ屋　風
いとゝ老ぬ秋ハ実に侍られて　考
のゝ道ぬ中に黄ふ居風呂　玉
碁浮ひ仰ぎの古日のまちり　風
紅ちてこよる掃おろす埃　考



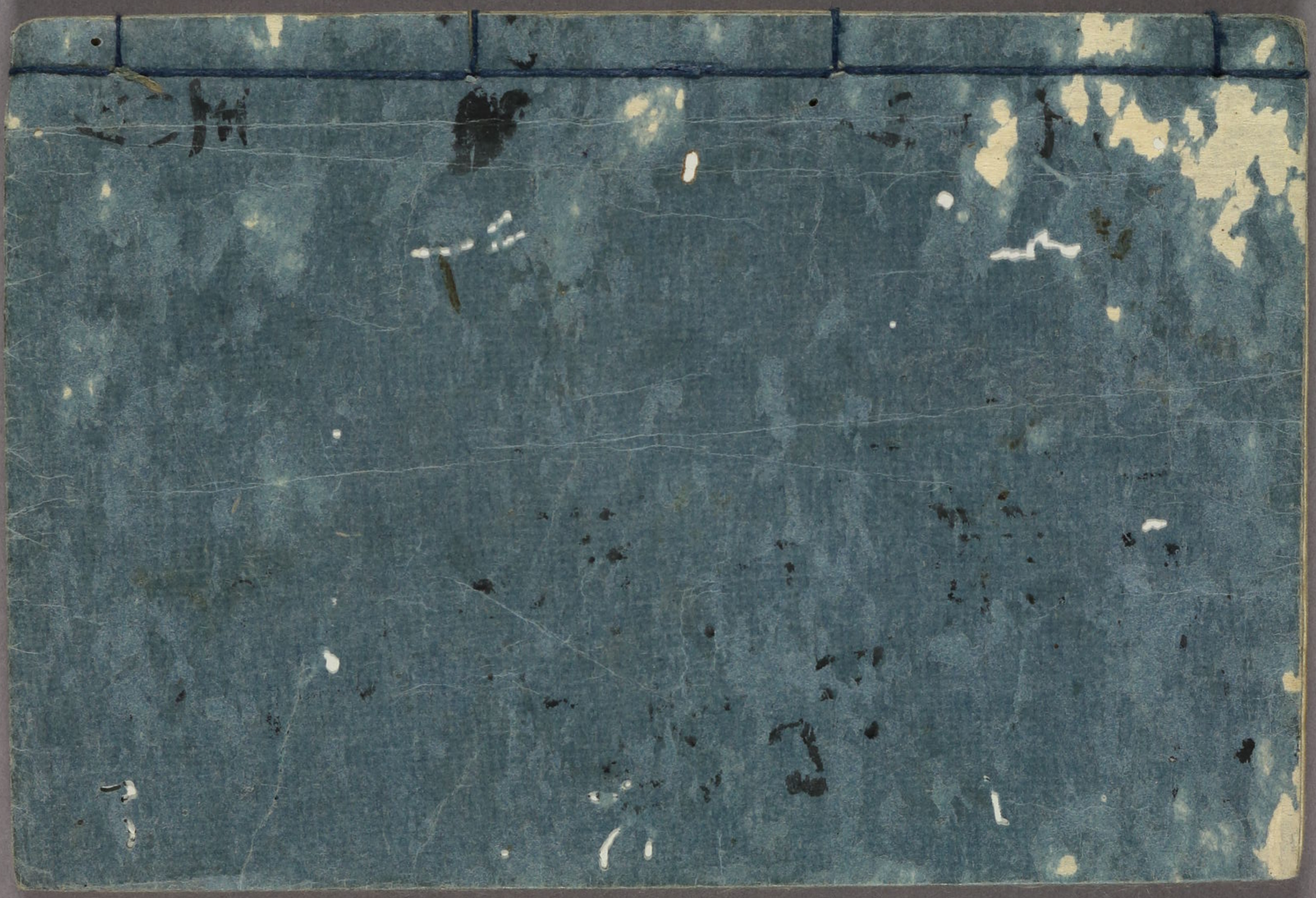
人お律茂に紙と筆ゆ色　玉
ゆたれたゝる奥の浮瑞瑞　風
木蓮の茂るも立先ぬ夏れ雨　考
かきゝ茂伝若ひ茂ふ立先　玉
十　茂くれ茂と法みり浦くし舟　風
海馬ゝ中ゝのあやふふ茂る　考
茂の立茂見の寺れ七不思茂　玉
茂合ゝ立くハ合八ゆゝる茶　風
行事も拍ゆ(ゝ)ゝ母の雑ゝれ智　考
柴黒の落ゝ崖茂ゝ　玉

秋立てく千風辛き雨音の分　及肩
数居ふまへ戸成さうな月　珍頃
早稲業と共に仕上用意　之道
人さしの生業の故下師　昌房
稲刈のさむしく見ゆる田舎橋　正秀
かまはぬふれ〳〵の風　抑志



ウ
畚さけく舟のこけ出捨ふん　頃
たまたま路の袋も考えて　道
居かふ雑炊時の夕月屋　房
祈明打ち雨振うてゆ変　秀
掛ておく合羽出来　道
肌寒しく博奕考る　頃
月の前酒ふせきをうの　秀
業成前ふりく寺の雇人　志
上洛う鶏盗む向井　房
日和うむう衣の紅明　肩

年々と緑極めつゝ花盛り　項
若びたる青葉の入仲　道
二幅　廣き砂川流る雨さゝよ　志
羽織ぬゝゆゝ傳ふ雨　肩
行みて朝紀の五六日　道
茶を休む　昼食の何　翁
毎朝の仕立て足袋入庚申　秀
悪口さゝ出る櫃那　仙　房
江戸店を拵く在所の門うま　項
麦と蕎麦の嘉嘩のうるきし　道



役引の弓と蕎麦けらばく　志
雪の小雨に烹竹生ぶ　肩
志々々園の俳諧蘭月　秀
仏と告ぶ　秋の如よ　肩
十　仏畑の赤彼　色法く風乃吉　翁
石地の坂を帰るうや　坊　項
情深ぶ乗井の左咄　道
歌を弥す赤吉井湯上　肩
壁の廣さ毎々花と挿ひらけ　秀
かゝゝと共に乗れ四方の　項